

## 放射性廃棄物研究の発展に向けて

日本原子力学会放射性廃棄物部会部会長

東海大学教授

清瀬量平

21世紀の人類にとって Population-Poverty-Pollution の 3P と Economy-Energy-Environment の 3E とが解決を迫られる重要な trilemma であるとされている。そして地球規模でのエネルギー問題における原子力の重要性もいっそう高まるであろうが、環境汚染の面での原子力発電の優位性を実証するためのキーポイントはやはり放射性廃棄物の問題であろう。

その中でも高レベル廃棄物の地層処分の安全性評価は、評価すべき期間が超長期に亘り、また評価に当たって考慮すべき事象が多様であり、かつ評価の際に必要なデータの不確実性が大きい点で、従来の工学的手法を超えた新しい考え方が必要となろう。

これらの問題について我々の放射性廃棄物部会では、その前身である研究連絡会に引続き 10 年余りにわたって、関係する各分野の研究者の間で自由に意見や情報の交換ができる場としての活動を続けて来た。そして昨年 6 月には、放射性廃棄物に関わる工学、理学、社会科学などの学際的な領域の研究成果の発表の場として、“放射性廃棄物研究”が創刊された。

その第 1 巻第 1 号では、昨年春の年会（筑波大）における部会企画セッション（廃棄物と社会）での総合講演 3 件の要旨の他に 11 件の、主として地層中の核種の拡散・収着に関する研究論文が掲載された。そして今回刊行される第 2 号には、昨年秋の大会（北大）での“放射性廃棄物の技術開発と情報伝達”に関する総合講演の要旨と、地層中でのコロイド、有機物、微生物の挙動に関する研究論文 10 件が掲載されている。

このような部会誌の発行については、出版小委員会の方々の並々ならぬ努力のたまものであるし、また執筆者諸氏の献身的な協力のお蔭であることは言うを待たない。紙上を借りて厚くお礼を申し上げますと共に、次号以降も益々斬新な企画の下で質の高い内容の部会誌が続々と刊行されることを期待する次第である。